

氏名(国籍)	銭 初 熹 (中国)
学位の種類	博士(芸術学)
学位記番号	博甲第1,585号
学位授与年月日	平成8年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	中国の小学校における絵画教育の研究 —日本との比較・考察—

主査	筑波大学教授	仲 瀬 律 久
副査	筑波大学教授	伊 藤 鈞
副査	筑波大学教授 文学博士	相 馬 隆
副査	元筑波大学教授 博士(芸術学)	宮 脇 理

## 論 文 の 要 旨

本論文は、中国の従来の普通教育における美術教育研究が総合的に考察したものが多く、そのため諸側面について論述してはいても深さにおいて欠けるものがあることの反省にたち、美術教育の全ての側面からの考察ではなく、小学校の絵画教育の側面から中国美術教育の抱える問題を考察したものである。そして、その研究過程において、諸問題の歴史的な解明を試み、中国や日本における先行研究および日本の美術教育との比較考察を通じて、中国の美術教育研究の深化を図ったものである。

論文は、序章「研究の目的と方法」に始まり、第1編「絵画教育に関する理論考察」、第2編「中国の小学校における絵画教育」、第3編「絵画教育改革への視座」、そして結章「改革の課題」という構成になっている。

第1編は、第1章「絵画教育に関する先行研究」、第2章「絵画教育に関する理論研究」、第3章「絵画教育の諸相」から成り、まず第1章においては、中国と日本における絵画教育に関するそれぞれの理論研究の背景に存在する事項が明らかにされ、研究の成果と欠点が評価された上で、中国および日本の先行研究についての比較が行われている。次で、第2章においては、中国の絵画教育に影響を与えている三つの思潮、すなわち、中国の伝統的な絵画教育思潮、諸外国の創造主義の美術教育思潮、アメリカの美術教育思潮の一つであるDBAEの運動について考究し、絵画教育の目標、内容、方法および受容の状況という側面から、伝統と現在、模倣と創造、創造と審美などの問題について論考している。また、第3章では、認識論、教育心理および総合的な美術教育の視点から、絵画教育の諸相についても理論考察を行い、それぞれの特徴や問題点を明らかにしている。

第2編は、第4章「中国の小学校における絵画教育の系譜」、第5章「中国の小学校美術教育大綱における絵画教育」、第6章「教科書に見られる中国の小学校における絵画教育」よりなっている。ここでは、中国の小学校における絵画教育の設立展開過程を清朝末年の学校における絵画教育、普通小学校における「図画科」の開設、辛亥革命後の小学校における図画教育、国民党政府時代の小学校における美術教育、社会主義建設時代の小学校における図画教育という五時代に分けて課程標準などの公的なカリキュラムにおける絵画教育に焦点をしばって検討している。第5章では、1979年度版と1992年度版の美術教育大綱における絵画教育の目的、内容、方法及び実施の状態に焦点を当てて分析・検討し、さらに、1992年度版の美術教育大綱と日本の平成元年度版の学習指導要領との比較を行い、1979年から今日に至る中国の小学校における絵画教育とその変化の過程を明確にしている。第6章においては、統計の方法を用いて中国の小学校美術教科書における絵画教育に関する内容を中心にし

て調査を行い、公的なカリキュラムに示された絵画教育の目標、内容及び方法を教科書にどのように具体化するかを明らかにしている。

第3編は、第7章「絵画教育実践の事例研究」、第8章「学校以外の絵画教育」からなっている。第7章においては、中国の初等教育の代表的な学校としての琅琊路小学校と日本の筑波大学附属小学校における絵画に関する授業の事例研究を行い比較考察を行っている。第8章では、中国の学校外組織である少年宮における絵画教育に関する研究に重点を置き、少年宮と小学校の絵画教育との比較を行い、幅広い視野から日本の美術館教育等ととりあげ、学校と学校外における教育との連携の可能性を求めている。

結論では、(1) 絵画教育目的の明確化と授業目標の多様化、(2) 絵画教育内容の精選化、(3) 絵画教育方法の確立、(4) 学校外の絵画教育との連携、(5) 師範学校の美術教育の改革、の五点を問題提起し、これらの問題に対応する視点と方策を示唆することにより、中国の小学校における総合的な美術教育の新たな在り方を希求している。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、中国における美術教育の改善と改革を目的に、とりわけ現在中国の小学校の美術科に50%の比重を占めている絵画教育に焦点を当て、その問題となる三つの点、(1) 技術中心に偏している絵画教育、(2) 作品中心主義、(3) 教師中心主義、を中心に、まず、中国の絵画教育に関する先行研究の理論や諸相を究明し、次いで、中国の小学校における絵画教育の回顧及び現状の考察を通じてその教育の全容を可能な限りにおいて明確化し、さらに、日本の図画工作教育や学校外の絵画教育に目を向けて比較考察することにより、今後の中国の小学校における絵画教育の新たなありかたを示唆したものである。

研究方法としては、記述、解釈、調査、統計的処理・事例研究などの実証的研究方法を用いて研究を進めるとともに、問題の因果関係をより一層深く究明するため、部分的に理論的研究方法、歴史的研究方法及び比較研究方法を取り入れている。

主題設定は、今後この研究に基づいて幼、小、中、高、大その他、生涯教育も含めた多様な理論的考察や実践研究を縦横に加味しうるものとなっており、しかも現在の中国において最も欠落している部分を鋭く指摘しており適切である。日本の美術教育との比較考察においてこれを行ったことも、中国の今後模索すべき道を明らかにする上で適切であったといえる。

本論文においては、特に中国における絵画教育領域の先行研究が綿密に成されており、これが後学に資する所は非常に大きい。また、この種の比較研究は日中両国において先例を見ないものであり、その点で本論文のもつ意義は甚大なものがある。

日中の社会形態の相違から、歯に絹を被せた表現をせざるをえなかった点や、哲学的な考察に欠ける点が指摘されたが、留学生であるための言語上の様々な困難があったと思われるにもかかわらず、それを克服して日中の膨大な研究資料と文献を探索調査し、克苦勉励して論文にまとめ上げた成果は高く評価できるものである。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。